

海洋調査船

「わかしお」

見学記

鎌田清吉

昨年12月下旬「わかしお」に同乗して 相模湾の中深海域における音波探査の実施が試みられたが これに先だって「わかしお」の見学があり 地質調査所からも数人の関係者が参加した。

海洋調査船「わかしお」については 12月はじめNHKスタジオ102で放映され紹介されたので 記憶にある方も多いことと思う。民間企業で はじめて建造された海洋調査船として 測量調査 地質調査 海象調査に適するために いくつかの特長をもっている。ここに見学記をしたため 読者の参考に供したいと思う次第である。

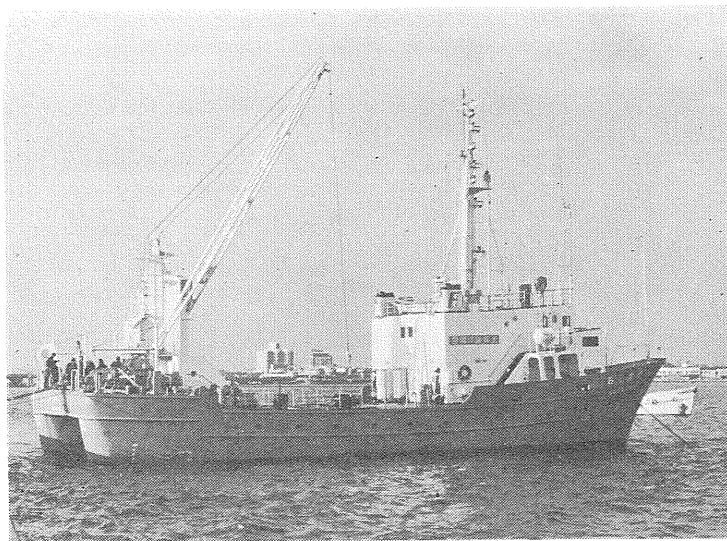
見学当日は快晴 江の島棧橋に係留されている「わかしお」に乗船した。早速 出航前 船長 機関長の案内で 船内の機材の配置 機器 居住室など見学する。

調査研究用に設計されただけあって 船内は狭いなが

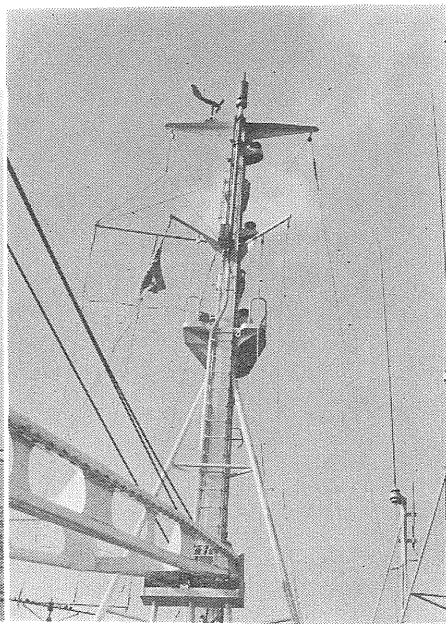
らも 手際よく必要な機械類が配置され 調査に必要なと見なされる場所と機器の電力源は 全く十分な余裕をもって設計設備され 配慮がなされていた。

甲板にはとりはずし自由な コンテナ方式の研究室 実験室がいつでも設置できるよう コンテナ固定施設が設けられ また コンテナを固定しないときは広い甲板面積があるので そこでの作業は容易である。甲板の中央には 観測用として2m²のマンホールが開閉できるよう設備されていて これは海底のボーリングとか 観測器材の海中への投下には 適しているようである。ブリッジには操船室と無線室 測量 測深の観測室がオーディオンカーテンで区切られるようにして 同一部屋にあり その上広さ4m×3mほどの床が何時でも使用できるよう 搬入観測器材のために残されている。この床の上の天井は 2m×2mの開閉できる天井にしてあり 大型機材の搬入にはきわめて便利であり注目された。岸壁から器材を甲板にあるいはブリッジに搬入するには 左舷寄りの後部甲板にある5tのクレーンが有効である。

測量器材としては 電波式精密位置測定装置 ロランA ロランC レーダー デッカ受信機を常置してあり 観測器械として電気式水温記録計 浅深海用測深器などが設備されている。また2,000m 捲ウィンチが船尾にある(第1図の配置図および写真1~6を参照せられたい)。この船は双胴船で 全長33m 全幅12m 総トン数368t 速力10ノット 発電出力300kW 船体は手とり早くいえば 船を2つ並べて その上に鉄板を敷い



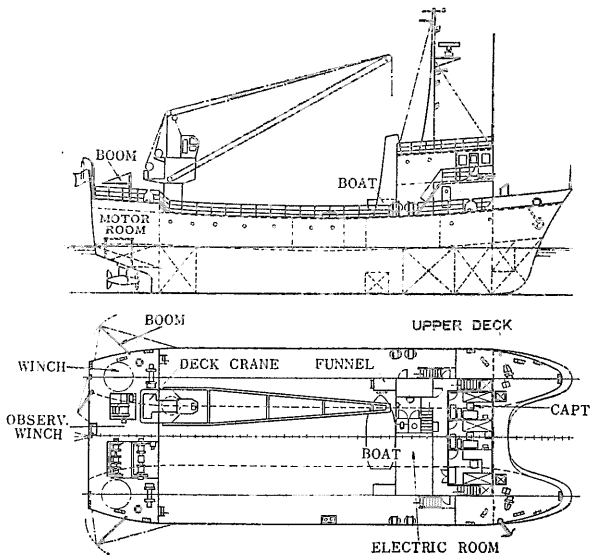
写真① 海洋調査船「わかしお」(368t)



写真② マストに取付けられた風速計・レーダーアンテナ・ロランアンテナ・デッカアンテナ

わかしおの一般記号図

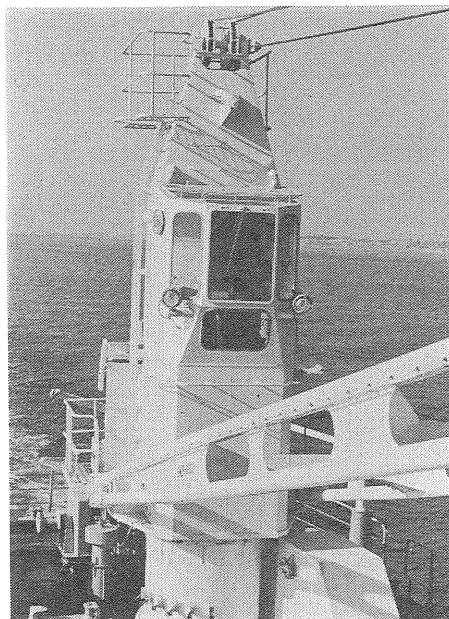
全長	23.00m	主発電機	交流発電機2基	
全幅	12.00m	出力	400KVA(300KW)	
総トン数	368T	注発電機用原動機	ディーゼル機関	
速力	約10kts	出力	464PS/1800RPM	
航行区域	近海			
塔勤人員	乗組員	10名	観測員	13名



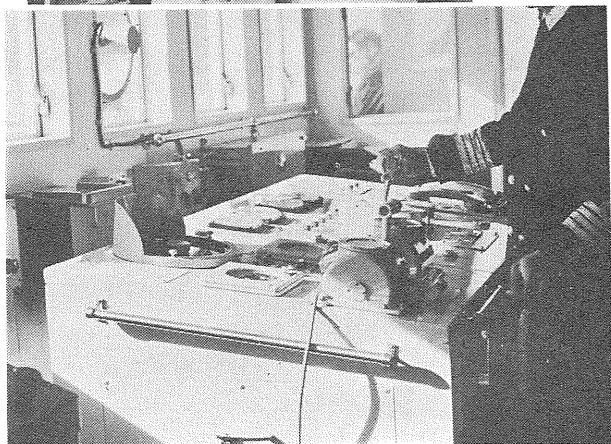
第1図 わかしおの特長は 双胴船のため総トン数(368トン)に比較して船幅が12mと 作業甲板が広いことと 船舵もたずに 前後左右に推進可能なラダープロペラ2基の操作で 操船できることである。

たようなものと考えればよい。

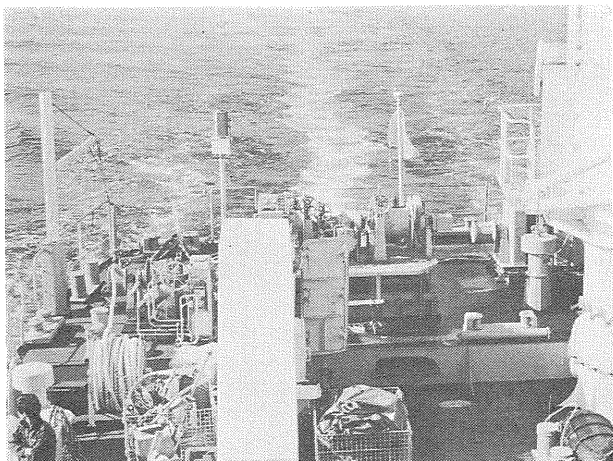
相模湾の沖に出て 舵もないのに2つのスクリューの操作で 旋回 横進 斜進 微速前進 急速停止 など自由自在に運航できるのがとくに印象的であった。この双胴船は 今後わが国の海洋開発のため 先駆的役割を果たすものと期待される。(筆者は 物理探査部)



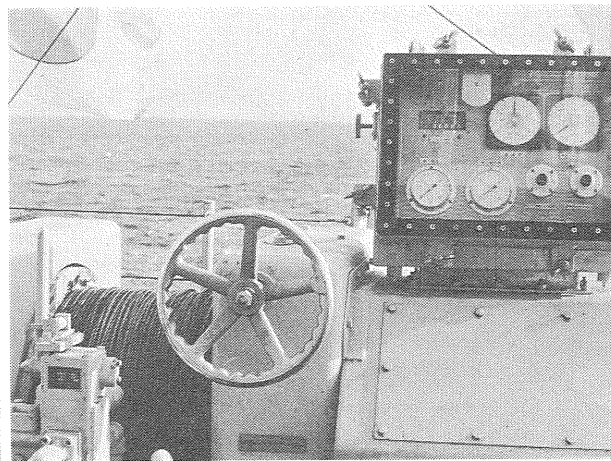
写真③ 巨大な5t クレーンのアームと操作室



写真④ 操 船 室
2つのレバー操作で その場旋回 横進 斜進 微速前進 急速停止ができる。また機関の操作は始動以外はすべてここである。



写真⑤ 後部甲板に常置された 2,000m ケーブル巻海洋調査用ウィンチ 左はしりのブームは 右はしにもある。



写真⑥ 海洋調査用ウィンチの操作盤ゲージとハンドル